ランゲージ・エクスチェンジ型学習の有用性

福永美佳

1　はじめに

本稿では、中国語の初級学習者に対するランゲージ・エクスチェンジを取り入れた授業の実践とその有用性について述べる。

ランゲージ・エクスチェンジとは、異なる言語を母語とする相手とペアになり、相互に学ぶ学習法であり、その気軽さから自主学習の場においてしばしば取り入れられる。ただし初級学習者にとっては、相手を見つけることが難しいうえ、相手を見つけられたとしても進め方がよくなければ、費やした時間にその効果が見合わないこともある。これに対して、学習者自身が自分の学習を管理するタンデム学習があるが、何を、どのように学び、どのような力を身につけたいのかという点を把握し、それを理解して外国語で伝えるのは、初級学習者には困難である[1]。

ここまで述べてきたように、ランゲージ・エクスチェンジにはいくつかの問題があるものの、自らが修得したい言語を母語とする相手と直接交流するランゲージ・エクスチェンジは、外国語の初級学習者に様々な利益をもたらす。第一に、外国語能力のレベルアップにつながる。第二に、学習意欲の向上と継続につながる。そして第三に、コミュニケーション能力の向上につながるのである。では、初級学習者はランゲージ・エクスチェンジをどのように自分自身の外国語学習に組み込んでいけばよいだろうか。

一つの方法として、教員がランゲージ・エクスチェンジの方向性を与えることが考えられる。つまり、初級学習者がランゲージ・エクスチェンジを行うそばで、教員が到達目標を与え、質問をし、助言するなど、適切に導く学習法である。

発音を非常に重視する日本の中国語教育では、初級学習者に対して、中国語の発音表記法であるピン

インと発音について多くの時間を割く。だが、その上達には個人差があり、習熟度もわかりにくいため、自信を喪失したり、学習意欲を低下させたりする学生も少なくないように見受けられる。もし目標とする言語を話す相手を具体的にイメージできれば、さらにはコミュニケーションをとる機会があれば、上記の問題に対する解決の糸口になりうるのではないだろうか。

本稿は、二〇一九年度における、学習期間が半年未満の初級中国語学習者を対象とした、ランゲージ・エクスチェンジ型学習の実践を報告する。

2　学習の内容

（1）学習者について

尚絅大学における初級中国語の授業は、十名程度の少人数クラス制を取る。約半年の学習期間を経た学生は、発音のルールを学び、簡単な構文が作れるようになる。ランゲージ・エクスチェンジ型学習の実施を決めたのは、学習意欲はあるが、留学経験がない学生たちにとって、留学生との交流が中国語を学ぶための絶好の機会であると考えたからである。

一方、ランゲージ・エクスチェンジ型学習の相手には、短期留学生を選んだ。本学では、毎年七月の約三週間、台湾の慈済大学から十名前後の短期留学生を受け入れている。留学生は日本語を専攻する学生だけではなく、他専攻の学生もおり、学習者の日本語レベルに多少ばらつきがあるが、総じて学習意欲が高い。留学期間中は日本語を学ぶだけでなく、黒川温泉で職業体験をしたり、浴衣の着付けを学んだり、茶室で本格的に茶の湯（表千家）を体験したりするなど、大学独自のプログラムが組まれている。このなかで学生交流の一環として、ランゲージ・エクスチェンジ型学習の機会を設けた。

（2）学習方法

授業は九十分を一コマとし、週に一回の頻度で三回実施した。

ペアは中国語を学ぶ学生一人につき留学生一人を充て、欠席などの理由で数に不均衡が出た場合には、学習者の状況に応じて調整した。

授業中は、お互い相手の母語を使って意思の疎通を図るように促し、言葉に詰まったときは英語の使用を認めた。

授業で使用した教科書は、庵功雄監修『にほんごこれだけ！1』（ココ出版、二〇一〇年）、同じく庵功雄監修『にほんごこれだけ！2』（ココ出版、二〇一一年）である。これは今回の短期留学生用に指定された教科書で、このなかから適した話題をいくつか選んだ。したがって、留学生たちは授業ですでに学んだことのある内容を、再度、ランゲージ・エクスチェンジによって学びなおすことになる。一方、中国語学習者に対しては、授業の前にプリントを配布し、どのような話題を扱うのか、そのためにどのような準備が必要か、などの説明を行った。

ランゲージ・エクスチェンジ型学習において重要なパートナー選びには、納得感が持てるように配慮した。カードに初級学習者にとっては難度の高い語彙を書いておき、日本語と中国語とで同じ意味のカードを引いたもの同士をペアとするくじを用意した。初回は、授業の最初にパートナー探しを行い、ペアが決まり着席後、自己紹介をさせた。パートナー同士の距離を近づけるために、互いの声掛けはニックネームを用いるようにさせた。その後、緊張感がほぐれたころを見計らって、皆にパートナーを紹介する他己紹介の時間を設けた。

（3）実践報告

①『にほんごこれだけ！1』第一課「おなかがすきました」

この課では、さまざまな食べ物や飲み物の固有名詞について学ぶ。「あさパンをたべましたか？」や「あさコーヒーをのみましたか？」という問いでは、パンやサラダ、牛乳など日常生活でよく使用される語句を学ぶとともに、朝ご飯の習慣や文化の違いについて会話する。また「にほんのりょうりは？」という問いでは、味覚の説明の仕方について学ぶ。

まとめでは、教科書の内容にもとづいて次の内容を発表する[2]。

□をたべました。

□をたべましたか？
はい／いいえ、□。
□をのみました。
□で□がすきです。
（にほんのりょうり）□は□です。

日本語学習者用の教科書を使用したため、ほとんどのペアが日本語を使って発表した。食べ物や飲み物は初級学習者にとって扱いやすいため、上記の空欄には、梅干しや寿司など日本を代表する食べ物だけでなく、太平燕といった熊本の名物料理を入れて話を広げるペアもいた。小籠包やタピオカなど台湾の代表的な食べ物や具体的な店の名前が紹介されたり、それについて他の留学生から詳細な情報が付け加えられたりして会話が盛り上がり、身を乗り出して聞く学生の姿が印象的だった。

②『にほんごこれだけ！2』第十課「わたしのしゅみ」

ここでは、お互いの趣味や好きなものについて会話をする。始めに「しゅみはなんですか？」という問いがあり、教科書では料理やスポーツなど、趣味の言い方について学ぶ。そのあとで、頻度や開始時期について話す練習をする。

まとめとして、教科書の例文に沿って趣味を発表させ、発表後にその内容に関する質問をした。教科書の例文とは、次の文章である[3]。

しゅみは□ことです。
よく□ています。
にほんに（へ）きて□に／く／ようになりました。
どうして□んですか？
□たほうがいいですね。

この例文では、学んでいる言語を使って全員が発表した。当初は内容が少し難しいと思われたが、何を、どのように話すかについて、事前にパートナーに相談し、互いに添削を行うことでみな無理なく発表することができた。他のペアからのさまざまな質問にも、協力し合い、答える様子が見られた。

教科書に沿って学んだあとは、それぞれ互いの趣味について会話する練習を行った。この授業に入る前に、趣味について外国語で話せるようにしておくという予習を課しておいたものの、なかには辞書を使って調べてきた単語が通じず、戸惑う様子も見られた。しかし、外国に行けばそのような状況は珍しくなく、試行錯誤してその状況を切り抜けるという経験ができた点は評価できると思われる。また同年代ということもあり、アニメやゲームなど趣味を共有する学生同士が言語を超え、意気投合する姿が見られた。

（4）考察

初回の授業では、教科書にそって進めていても会話が広がらないし、続かないペアがいた。とりわけ、これまで全く留学経験のない学習者のほうが外国語でコミュニケーションすることの難しさを感じ、気後れしているようだった。そのような学生に対しては、文字やジェスチャーを交えることの重要性や、同じ言葉を繰り返し、できるだけ短くゆっくり話してみるとよいなど、助言を与えた。ここで要領をつかんだ学生は次第に補助を必要としなくなった。

しかし、なかには積極的な留学生に主導権を取られ、うまく発言できなかったと落ち込んだまま授業を終えた学生もいた。そのような学生への対応として、相手と同じぐらい話すことを目指すのではなく、次の授業で使える三つのフレーズを考え、次回はこの三つを発言することができたら目標達成とするという課題を出した。授業中は机間指導を行い、状況を確認しながら進めたところ、目標が具体化されたことで、課題を達成することができ、自信へとつなげたようであった。

今回のランゲージ・エクスチェンジ型学習では、自分に関することや好きなことをテーマに選んだ。相手からの質問の予測がつきやすく、聞かれていることはわかっているのに言葉が出ないと、始めは苦戦していたようだったが、時間の経過とともに笑顔が増えていった。母語ではない言葉を使ってコミュニケーションができるようになるには、慣れや経験が重要であることを学生が実感できたことも、収穫

だったと思う。

三　おわりに

外国語を学習するにあたり、学習意欲の維持が不可欠となるが、発音を重視する中国語教育では、初級の段階で発音にかなりの時間が割かれる。初級中国語学習者にとっては、これが学習意欲を低下させる要因ともなる。それゆえ、初級の段階で目標言語の話者と直接話す機会を設けることが、意欲の向上につながるのではないか。こうした観点から、ランゲージ・エクスチェンジ型学習を実施した。

授業を終えてその効果は、本稿の冒頭で指摘した三点にとどまらず、さらに以下の二点を指摘できる。

（1）留学を考えるきっかけづくり、もしくは留学前に精神的な緊張をほぐし、心の準備をすることができる。

（2）同様の目標を持つ者同士を結びつける。

ランゲージ・エクスチェンジ型学習の最大の利点は、達成感が得られる点にある。正しい発音や正確な文法を身に着けることが重要なのは言うまでもないが、それに固執するあまり次の段階へ踏み出せないのでは意味がない。これまで学んだことが通用するという経験を早い段階で積ませることが、外国語学習において重要だと考える。

1　タンデム学習については、次のURLに詳しい。http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/center/tandem/about.html

2　庵功雄監修『にほんごこれだけ！1』（ココ出版、二〇一〇年）、一七頁。

3　庵功雄監修『にほんごこれだけ！2』（ココ出版、二〇一一年）、五一頁。